



もふもふで始める Mofumofu  
yorimichi seikatsu

のん  
びり

# 寄り道生活

便利なチートフル活用でVRMMOの世界を冒険します!

## 2

ゆるり

Illust.

にとろん





### パティエヌ

『桃カフェ・ピーチーズ』  
の店主。  
とっても美味しい  
桃スイーツを  
作ってくれる。

### スラ君

モモがタイムした  
スライム。  
感情豊か。  
釣りのお手伝いを  
してくれる。

### ルト

プレイヤー  
旅人。  
ぶっきらぼう。  
天然のリリを  
いつも心配している。

### リリ

プレイヤー  
旅人。  
明るく優しい性格。  
よくニコニコ  
笑っている。

### 桃色毛玉

ピーチ・ケサランバサラン  
光属性のレアモンスター。  
可愛い見た目に反して、  
相手を敵と見なすと  
恐ろしい即死攻撃を  
繰り返す。

### タマモ

先祖返りの  
キツネ族の獣人。  
もふもふが大好き。  
モモのことを  
こよなく愛している。

### アリス

はじまりの街に  
住んでいる女の子。  
魔石集めが趣味。  
仲良くなると、  
秘密の地図をくれる。

### モモ

アンジラバ プレイヤー  
激レア種族、天兔の旅人。  
好奇心が旺盛で  
寄り道が大好き。  
行く先々で色んな人と  
仲良くなっちゃう。  
好きな食べ物は桃。

## 第一章 新たな街へ行くぞ！

僕はモモ。種族ガチャでゲットしたアバター——天兔アシユタっていう羽のあるピンクのウサギのようなモンスターの姿——を使って、毎日のんびりとフルダイブ型VRMMOで遊んでるんだ。

ゲーム内は剣と魔法のファンタジー世界ですつごく楽しい！

でも、僕は今ちよっぴりピンチに陥おちっているのです……寂しくって泣いちゃいそう。

キョロキョロと周囲を観察する。うーん……見渡す限り、岩、岩、岩、そして溶岩ようがん——

「……地獄かな？」

ぼつりと呟つぶやいて、僕はガツクリと項垂うなだれた。

ここは、はじまりの街と第二の街の間のエリアボス——岩屋ロックライフがいた谷間を見下ろせる、岩山の上。

岩屋を倒すのはワールドミッションになっていた。ワールドミッションっていうのは、一つの

サーバー内で最初にクリアした人だけが報酬をもらえるミッションだ。

岩屋は火の古竜エレメンタルドラゴンのイグニスさんに倒されてるから、今のところ、ここに危険はないはず。

イグニスさんの攻撃の影響で、街道が溶岩のようになっていて怖いけどね！

討伐の報酬である転移てんいスキルなどを、自分で戦うことなく獲得できたのはありがたい。転移スキルを使うと、転移ピンをさした街中とかバトルフィールドに転移できるし。

でもイグニスさんによって強制的にここに連れてこられた上に、置いてけぼりにされちゃったことは「なーんでーなのー？」と嘆きたい。放置プレイは、ご褒美じゃないぞー！

心の中でイグニスさんにひとしきり文句を言っつて、なんとか平常心を取り戻す。過去のことより、今後のことを考えなきゃ。

どっかで死に戻り——体力が0になり、最終データセーブ地点に戻ることに——をしたら、はじまりの街の宿から再スタートできるだろう。ゲームデータは街中の宿に入る度に入書き保存されていて、僕の最終データセーブ地点は、はじまりの街の宿になってるから。

手っ取り早くはじまりの街に戻るには、死に戻りするのが一番だ。でも、ここでそれをするのもつたいない。

このゲームでは死に戻りする度に、アイテムや所持金の一部が没収されて、しばらくの間ステータスも半減するんだよ。

つまり、今死に戻りしたら、ワールドミッション達成の功績は保持できても、アイテムを没収される可能性がある。

そんなのイヤだし、できる限り死に戻りを避けて、自力で街に辿り着かなきゃ！  
「さて、どちらに進むかが問題だ……」

右手側に続くのは岩山。左手側に続くのは、はじまりの街に続くノース・サウス街道。

「たぶん、こっちが第二の街なんだよね」

右手側を眺める。岩が邪魔をしてるから、街は見えない。でも、進めば第二の街に辿り着くはず。

やっぱり行ったことない街って惹かれるし、こっちに進むしかない！

「いざゆかん、第二の街へ！」

気持ち切り替えて意気揚々と歩き始める——というより、飛翔スキルを使って飛んだ。岩場って歩きづらいたもん。

飛翔スキルは今レベル2で、十五秒間自由自在に飛べるんだよ。

第二の街ってなんて名前だったっけ？ と首を傾げながら移動し始めてすぐに、モンスターに遭遇して追いかけられた。

敵は巨大なゴーレムみたいなやつ。

動きが速くて、僕は逃げるのに必死で鑑定できてないから、詳細はわからないんだけど。

「ふぎやー！ このモンスター、怖いよー！」

必死に岩場を飛ぶ。後ろから、ドドドッと地響きのような足音がした。

「グオオッ！」

「なんか、鳴いてるうー！」

滞空可能時間が終わって、一旦着地してすぐに飛翔スキルを発動。

でも、着地した瞬間に地面が揺れたから、上手く勢いをつけられなかった。

痛恨のミス！

ずっと地面が揺れてる気がするの、モンスターの影響？

しばらく必死に逃げて、ようやく少し距離を取れたから、振り返って全鑑定スキルを発動する。

【吾むした岩ゴレム】

土属性モンスター。ブーツとすぎて苔が生えたゴレム

固有のテリトリーを持ち、そこに侵入した者を追い払う

素早さ・防御力が高く、物理・魔力攻撃どちらも効きにくい

地鳴りと岩落としで攻撃してくる

得意属性【風】 苦手属性【木】

「急に働きのよくなるのよくない！ ブーツとしてて！」

思わず文句を言っちゃった。僕、いつの間にかこのモンスターのテリトリーに入ったのかな？  
追いかけてからこいつに気づいたんだけど……さては、テリトリー広すぎだね？

「すくすくばっさーん——【木の玉】！」

とりあえず木魔術で攻撃してみるけど、あんまり効いてる気がしない。

これ、逃げ一択なのでは？ テリトリーから出れば、ついてこないかも。

「グオオッ！」

「なんか怒ってる。ごめんなさーい！」

攻撃したせいですね。うわ、地面の揺れがひどくなってる……着地したら、体が揺れるよ。  
とにかく逃げましょう。街までについてはついてこないでしょ。

「ガアアッ！」

「つて、なんか増えてるう?!」

ビックリ仰天。振り返ると、ところどころに苔が生えた人型の岩みたいなモンスターが二体になつた。ポケットを叩いたらビスケットが増えるみたいに、攻撃したらゴレムが増えるの？

「——いや、普通に、別のやつテリトリーに入っただけか」

最初から追ってきたゴレムが立ち止まっているのを見て、ちよつぱり安心した。

二体目にはまだ追いかけてられるから、逃げなきゃいけないのは変わらないけど。

僕の攻撃力じゃ倒すのに時間かかりそうだし、ひたすら第二の街を目指そう！ 全力で逃走だ！

しばらく必死に飛んでいたら、岩山が途切れた先に高い壁が見えた。

岩山の谷間にある街道が、壁にある門に続いているのがわかる。

「おお、あれが第二の街かな！」

結局、街の名前はなんだったつけ？ 思い出せないんだけど……まあいつか。

岩山を飛び下りて門の前に着地。僕を追ってきたゴレムはいつの間にかいなくなつた。

「……は？」

門衛さんが目を丸くしてるのを見て、僕はすぐさま冒険者ギルド証を差し出す。

「こんにちは、僕は冒険者のモモです。ただのモンスターじゃないよ」

僕は天兔テンソウというモンスターの種族だから、敵に間違われかねないもんね。自衛大切！

ウサギに羽がある感じの見た目は可愛いし、いきなり討伐されそうになるってことはないと思う。

というか、そうであってほしい。

「あ、ああ……あの、異世界から旅してきた人(?)です。モンスター種もいるとは聞いてましたが、初めて会いました」

マジマジと見つめられたけど、問題はなさそう。

門衛さんは僕の冒険者資格を確認して、すぐに「どうぞお通りください」って言ってくれた。

「第二の街オースへようこそ。歓迎しますよ」

「あ、オースだった!」

「はい? そうですが……」

なんか困惑させちゃった。ごめんよ。

街の名前を思い出せなくて、もやもやしてたのが解消されただけだから。

時々なんて思い出せないんだろっていうことあるよね? そういうの、めっちゃ気になっちゃうんだよなあ。

「気にしないでー。それじゃ、入らせてもらいまーす」

「あ、そういえば、ここにいらしたということは、モンスターを避けてこられたんですか?」

街に入った途端、門衛さんが思い出したように尋ねてきたけど……モンスターってどれのこと?

「ゴレム?」

振り返って尋ねたら「いえ、岩犀というモンスターですよ」と返された。それか!

「……それは火の古竜が倒してたよ」

「は?」

ぼかんとした顔の門衛さんから、僕は目を逸らす。

あれは悲しい事故(?)だったね……僕が言えることは一つだけ——

「古竜って凄く強いから、敵に回しちゃダメだよ……」

「そんな予定はそもそも一切ありませんけど……?」

でしようね。僕が頷いてたら、状況を理解した様子の門衛さんが「え、でも、岩犀が倒されたというのが事実なら……」と言いながら目を見開く。

「——この街の冒険者による討伐計画はどうなって……?」

「何それ?」

初耳の情報だ。ふざけるのをやめて真剣に聞いてみる。

「岩犀が交易の障害になっていたため、近々、高ランクの冒険者を集って、全員で一斉に討伐を行うことにしていたんですよ。ちょうど異世界の方がたくさん来られるということで、有望そうな方がいたら作戦に協力してもらおう予定でもありました」

つまり、僕らが異世界の住人と協力して岩犀を倒すというレイドイベントが開催予定だった?

「はじまりの街にたくさん冒険者が来てたのは……」

「異世界の方をスカウトするためですね」

今さら『バトルチュートリアルでの指南役冒険者多すぎじゃね?』話の裏設定がわかったよ!

このゲームの最初の頃に、異世界の住人の冒険者さんが指南役になって、バトルの仕方を教えて

くれるチュートリアルがあったんだ。その際にプレイヤーごとに違う指南役が用意されて、掲示板で『指南役のバラエティが豊かすぎる(笑)』って話題になってたんだよねー。

その冒険者さんたちみんな、岩屋を倒すイベントのためにじまりの街に集まってきたのかあ。

僕の指南役だったカミラと仲良くなったら、一緒にイベントに参加できたのかな……何それ、凄く楽しそうだったじゃん！

すでにイグニスさんの攻撃一発で倒されちゃってるけどね！

「報酬の転移スキルって、もっとたくさんの人に行き渡る予定だったのでは……？」

恐ろしいことに気づいてしまった。

岩屋が倒れた結果、ワールドミッションを達成したことになったんだけど、報酬に転移スキルがあったんだよね。

めっちゃ便利なスキルだと思っただけど、僕一人しかもらえてないのはいいのかなーって不安だったんだ。今のところワールドミッションでしかももらえないスキルっぽいし。

本来は岩屋討伐のレイドイベント報酬として大多数に行き渡る予定だったなら、もらえなかったみんなが可哀想では？ 僕、みんながもらう機会を潰しちゃった？

「――運営さんに言っとこう！」

どっかで補填してくれー！ 神頼みならぬ、運営さん頼みです。僕、恨まれたくないから。

メニューから運営さんにメールする。ついでに、魔術を使う時の変な詠唱についての苦情も入れとこう。早く文言変更か、詠唱破棄スキルを準備してください！

「とりあえず、岩屋の情報は上に報告しなくては……！」

そう言いながら、門衛さんが慌てて上司がいる門衛所に向かう……ここ、空にしているんです？ はじまりの街から来る人は、今ほとんどいない感じとはいえ、ね？

「――あ、モモさん！ ぜひ一緒に！ 詳しいお話を聞かせてください！」

「えー……」

面倒くさいなあって思ったら、うっかり心の声が漏れてしまった。門衛さんが苦笑いしてる。

「桃のソルベをお出しできますよ。長旅でお疲れでしょう？ 休憩を兼ねて、お願いします」

「桃のソルベ!? 的確に僕の好物を提示してくるの、凄すぎない？」

あつさり釣られますー。僕、桃が大好きなんだよ。第二の街は農業が盛んで、果物がたくさんあるって聞いてたから、楽しみだったんだよねー。

僕はルンルンしながら門衛所に向かい、知る限りの情報を話した。説明は面倒くさかったけど、もらった桃のソルベは冷たくて甘くて、最高に美味しかったよ！

門衛さんのお話が終わってから、ようやく第二の街オースに入る。新しい街を楽しむぞ。

第二の街はグリーン系の色をした建物が多いみたい。目に優しい感じがしていいねー。

「はじまりの街は港街って感じだったけど、こっちは山に近い街って感じ？ 田畑が多いなあ」

周囲を見渡して呟く。

農業が盛んだって言われるのがよく理解できる。建物と同じくらい、田んぼや畑が目立っている。日本も、地方の街ってわりとこんな景色だよなあ。



街はぐるっと高い壁で囲まれていて、田畑も街中にある。外はモンスターがいるから、農作業なんてできないもんね。

そんなことを考えながら歩いてたら、たくさんの果樹かじゅがあるエリアを見つけた。

「ふわぁ……！ 果物たくさんだ！ 桃、ブドウ、サクランボ、梨……とりあえずたくさんある！」

正直、種類多すぎだと思う。ここ、果物天国かな？ 季節感はあるまり関係なく実が生なってるのは、ゲームらしい。

たわわに実っている果物を眺めて、僕は思わず「美味しそうだなぁ……」とこぼした。

食べたい……

「お？ お客さんかい？」

果樹園から男の人が出てきた。僕を見て驚いた顔をしたけど、「ああ、噂の異世界のやつか……」と呟いて納得してる。

「ここ、販売してるの？」

「してるぞ。果物狩りもできる。採った分だけ金を払ってもらうけどな」

時間制じゃなくて、収穫量に応じた料金制ってことね。意外と、いつの間にか高いお金を払うことになっちゃうやつだ。

「……おいくらですか？」

「種類によるぞ。ブドウなら、一房二十リョウだな」

「お安い！」

はじまりの街の市場に果物が並んでた時に値札をチラ見したけど、倍以上の値段だったよ。ちなみに、リヨウはこのゲーム内での貨幣単位。この街での果物の市場価値はまだわからないから、提示額が本当に安いかはわからないけど――

「とりあえず、桃、採りたい！」

「毎度ありー。桃は一個二十五リヨウだぞ」

我慢できなかった。桃食べたいんだもん。さっきソルベを食べたけど、それだけじゃ食欲はおさまらないよ。

果樹園主からカゴを受け取り、桃の木に案内してもらおう。木に実った桃は、どれも美味しそう。大きさは色味はそれぞれ少し違うみたいだ。

「どれがいいかなー？」

「甘いのは、全体的にふっくら丸みがあつて、紅く色づいてるやつだぞ」

「なるほど……じゃあ、これかな！」

飛翔スキルを使って飛んで、目当ての桃を掴む――途端に採集スキルが発動して、あつという間に桃を収穫できた。

桃は両手で抱えるくらい大きい。これを丸ごと食べられるなんて、夢みたいだ！

「うーん、美味しそう！」

「飛べるつてのは楽でいいな」

果樹園主に羨ましそうに言われた。飛べないと、脚立とか使つて収穫しないとイケないもんね。

「――お前さん、ここでバイトしないか？」

「へっ、バイト？」

次の桃を品定めしてたところで、唐突に提案された。

果樹園主は真剣な表情だ。

「ああ。この果樹は基本的に三日で実ができる。種類ごとに収穫する日を分けてるんだけどよお……収穫つてのは結構な重労働なわけだ。朝一番で市場に持つていかないとならねえし。お前さんが手伝つてくれたら、ちつとは楽できるなあと思つてよ」

なるほど。ここの果物が市場に卸されてるのか。果樹はたくさんあるみたいだし、三日でできるなら、収穫が大変なものも理解できる。

「僕、毎日に来れないよ？」

「おう。時間がある時だけでいい。バイト代は、好きな果物三十個つてことで」

「果物、三十個……！」

凄く心惹かれる。果物一個二十リヨウとしても、一回で六百リヨウの報酬つてことだ。果物を買うお金が浮くのは最高。来るのは気が向いた時だけでいいつていう緩さだし。

「――わかつた。その依頼、受けるよ！」

「お、ほんとか。助かるよ。俺の名前はフルーオだ。よろしくな」

「僕はモモだよ。よろしくね」

挨拶しながらフルーオさんと握手した。

デイリーミッション【果物収穫バイト】を開始しました  
毎朝ミッションを達成することができません

### ミッション【果物収穫バイト】

第二の街オースの果樹園で果物を百個収穫する  
ゲーム内で朝の時間帯のみ、何度でも達成可能  
達成報酬は果物三十個

アナウンスもあつたし、これって正式なミッションだったんだね。

ゲーム内時間の一日は、現実時間の六時間に相当する。現実時間の二時間ごとに、ゲーム内では朝・昼・夜が来るんだ。朝のタイミングでログインできたら、忘れずに果樹園に来よう。

「今日はもう昼時だから、また明日以降に頼むな」

「りようかいです」

「とりあえず、桃三つ、サービスにしてやるから、持ってけ」

「いいの!？」

今日の桃採集も、三つ無料になっちゃった。ラッキー。

ルンルンしながら、あと二つを選びに選んで採集する。どれもふんわり甘いおいがして美味し

そう！

「桃好きなら、中心街にある『桃カフェ・ピーチーズ』ってところに行ってみるといいぞ」

「桃カフェ?」

「桃を使ったメニューが山ほどある。評判がいいらしい。この桃も卸してるしな」

お得意様を紹介された。桃を使ったメニューがたくさんなんて惹かれる。絶対行こう。

フルーオさんにカフェがある場所の地図をもらったら、システムのマップに反映された。便利でいいね。現実もこうならいいかな。

「とりあえず、お腹空いたから早速一個いただきますー!」

桃を抱えて口を開ける。皮を剥かなくても、ゲームシステムで問題なく食べられるから便利だ。バトル中に悠長に皮を剥いてられないからだろうけど。

かぶりついた瞬間に、じゅわっと果汁が溢れてくる。甘くてみずみずしい。

「うっまいー!」

「そりゃよかった」

フルーオさんが相好を崩して言う。夢中で食べちゃって、半分なくなったところで満腹状態になっていたことに気づいた。やっぱり僕って、燃費がいいよね?

「あ、鑑定するの忘れてた。リンゴみたいにレアアイテム化するかな……?」

リンゴは食べかけだと、【天兔の食べかけリンゴ】っていうアイテムになって、空腹になりにくくなる効果が追加されてたんだ。桃はどうだろう?

【天兎の食べかけ桃】レア度☆☆☆☆  
満腹度を5回復する。一時間、空腹になりにくくなる  
天兎が50パーセント食べ残した桃

やっぱりレアアイテム化してる！

天兎って、果物特化でアイテムに影響を与える感じなのかな。ラッキー。

もう満腹だし、これはアイテムボックスにとっておこう。

「もういいの？」

「うん、お腹いっぱいだから」

「モモは小さいからなあ。いっぱい食って大きくなれよ！」

桃を一個追加でもらった。僕はこれ以上大きくならないと思うけど、ありがたく受け取る。

「それじゃ、僕、街探索に行ってくるね！」

「おう。中心街で宿を探すなら『黄金リンゴの宿』がオススメだよ」

「なんか派手そうな名前だね？」

フルーオさんのオススメに首を傾げながらも、とりあえず地図をもらっておく。

中心街にあるみたいだし、歩いてたら着くでしょ。高そうだったらやめればいいし。

大好物の桃を食べられて上機嫌なまま街中を歩く。

お米も欲しいな。プレイヤー友だちのリリはお寿司が好きだって言うってたから、作ってあげたい。何より、僕はどんぶり飯を食べたいんだ。豪華海鮮丼とか、夢だよな。

田んぼや畑を横目に、建物が密集してそうなエリアを目指す。

マップ上に冒険者ギルドとかのマークがついてるから、そこを目指せばにぎやかなところに着くはず。田畑エリアはあんまり人がいないなあ。

「おお？ いいにおいがする……」

建物がたくさんあるエリアに入った途端、魅力的な香りがしてきた。

これは、バーベキューの雰囲気！ クンクンとおいを嗅いで、探し歩く。

僕がモンスターの姿だから街の人にちょっと驚かれるけど、すぐに「ああ、異世界の」って納得してくれてるし、問題はなさそう。

周囲の反応を半ばスルーしながら歩いた先に、屋台エリアがあった。料理や食材、食べられないアイテムなどを売ってる屋台がごちゃまぜに並んだ大規模な市場だ。

とりあえずいいにおいがする屋台に並ぶ。人がたくさん並んでるから、人気の屋台なんだろう。

楽しみー。さっき満腹って言ったけど、食べられないわけじゃないもん。

「うお？ ああ、異世界の……」

列の先頭まで来たらちよつと驚かれたけど、その反応にはもう飽きてるから、スルーして商品を眺めた。お客さんはみんな、野菜とお肉が串に刺さった料理を買ってるようだ。

「この屋台はバーベキューしてる感じ？」

「そうだぞ。一番人気はトウモロコシとピーマン、ロケット夢羊の肉を刺したやつだな」

「美味しそう！ 二本ちょうだい」

「毎度あり！」

手早く焼き上がった串をもらった。具材が大きくて食べごたえがありそう。

トウモロコシはしょうゆ醤油が塗られてて香ばしい香りがする。ピーマンはなんかのタレがついているのかな。夢羊のお肉はラムっぽい感じ。

一本をアイテムボックスにしまって、屋台から少し離れたところがかぶりついでみる。

最初はピーマン。焼き肉のタレっぽい味付けで、ピーマン自体、苦みが少なく食べやすい。

続いて夢羊のお肉。どんなモンスターなのか想像できないけど、味はジンギスカンっぽい。結構分厚いお肉だけど、タレの味が濃いからかクセを感じない。柔らかいし美味しい！

最後はトウモロコシ。僕的に、焼きトウモロコシはデザートだ。

噛んだ瞬間に溢れる果汁。醤油がちょっと焦げた感じの香ばしさで、飽きることなく食べられちゃう。甘じょっぱい食べ物って、止まらなくなるよね。

「うまうまー」

堪能してたら、街の人が「あのウサギさんが食べてるの美味しそう。どこで買ったのかしら……あ、あそこの屋台ね」って言いながら通り過ぎていく。僕が串焼きを買った屋台は、さつきよりも列が長くなってた……僕が販促した感じ？ 美味しいからみんな楽しんでくださいな。

近くにあったベンチで一休み。空が暗くなってきてるなあ。今日は一日いろんなことがあったけ

ど、終わりよければすべてよしだ。桃も串焼きも美味しかったから幸せ。

「次もきつと楽しくな〜る！」

願掛けの言葉は、一番星まで届いたかな。



翌日ログインして、フルーオさんオススメの『黄金リンゴの宿』の部屋を見てから気づいた——これ、最終データセーブ地点変更されちゃって、死に戻りしてもはじまりの街に戻れないよね？

「……やらかしたああ！」

ぐてつとベッドに倒れ込む。ベッドの寝心地がいいから、ついまつたりしちゃいそうになるけど、ちよつとこの先のことをいろいろと考えないといけない。

第二の街オースに着いた時は、ここに転移ピンを設定して死に戻りしたら、はじまりの街に手っ取り早く帰れるし、いつでも第二の街に転移スキルに戻ってこられるな——って思ってたんだよ。

錬金術ギルドで所持品をストレージに預けたら、死に戻りしても没収されることはないし。

でも、お腹いっぱい幸せで、うっかりそのことを忘れて普通に宿に入っちゃったから、最終データセーブ地点が、第二の街オースの宿に上書きされちゃった！

はじまりの街に転移ピンを設定してないし、自力で戻れないと、ずっと第二の街に居続けることになっちゃう……リリとルト、早く来ないかなあ。はじまりの街で出会った友だちが恋しい。

「——やったことはしようがない。とりあえず、第二の街を楽しもう！」  
気分を切り替えるために宣言した。

レベリング——経験値を稼いでレベルを上げることができればはじまりの街に戻るだろうし、しばらくこの街で遊ぶぞ。

今は朝じゃないから果物収穫バイトはできないし、前回に引き続き街探索をすることにした。

「あ、この街だと、農地のうちを持てるはず！ 聞いてみないと」

前にルトが言っていたことを思い出して、なんだかワクワクしてきた。

農地ってどんな感じかなー？ 農地を持てるなら、何を育てよう？

適当に部屋を片づけて、宿の一階へ。そこで女将おかみさんに農地のことを聞いてみた。

すると、街の住人ではない人は、農地を一定期間借りて十分に農業できる能力があると判断されれば、農地の購入権をもらえる、とのことだった。

農地を借りたり買ったりするのは、不動産ぶどうさんギルドで可能らしい。

そこではホーム——自分の家も購入できるらしいけど、こちらも借りて信用を得た後でないと購入できないようだ。いい言い方をするなら、お試し期間があるってことだね。

早速借りに行こうと街をトテトと歩く。

中心街にある宿からは、不動産ギルドはあんまり遠くないらしい。人通りは少ないし、のんびり観光できていいね。

今のところプレイヤーらしき人を一人も見かけてないんだけど、まだ到着してないのかな？

確か、今日の早朝にゲームのアップデートがあつて、第二の街に行けなくなつた不具合は解消されてるらしい……そんな不具合が出てたこと、僕はお知らせを見て初めて知つたよ。

なんでも、道が溶岩状態になつて、進もうとしたら死に戻りしちゃう感じだったんだって——もしかなくても、それってイグニスさんの仕業しわざだね。

運営さんの想定を超える被害を残してたって、どうということなの……

「——あ、ここだ」

大通り沿いに、間取りが載ったチラシがガラスにペタペタと貼られた建物があつた。見るからに不動産会社……大きく『不動産ギルド』って明朝みんちやたい体の文字が扉に書かれてる。

わかりやすいけど、もうちょっとデザインを考えてもいいのでは？

扉を押し開けたら、カランと古風なドアベルの音がした。

「いらつしやいませ……あ、異世界の方ですわね」

「うん、その反応慣れたよ」

不動産屋さんはず僕ぼくの頭上を見て、首を傾げてから視線を下ろし、驚いた顔をした後、笑顔を取り繕つくろう。一連の流れは、最近でも黄金リンゴの宿で経験済みです。

「失礼いたしました。本日は物件をお探しで？ それとも土地ですか？」

カウンターに案内されて、椅子に座る。

この椅子くるくる回るやつだー。こういう椅子って、座ると延々と回りたくなくなっちゃうのは僕だけ？ 羽ばたく力で椅子ごとゆっくり回る。すると、僕を眺めていた不動産屋さんが微妙な笑顔で

口を開いた。

「……椅子を回してさしあげましょうか？」

子どもっぽいことをして、申し訳ない。

「いえ、大丈夫です」と断り、真剣に話すことにして、カウンターに身を乗り出す。

「僕、農地とホームが欲しいんだ。どっちも、まずは借りてみてから、って聞いたんだけど」

「さようでございます。では、異世界の方が借りられるものをお見せしましょう」

不動産屋さんが宙に手を翳したら、ブンツと半透明のスクリーンが現れた。ステータスを見る時と同じ感じだ。

「まずは農地ですね。異世界の方には街の北側にある農地が用意されています。全部で百区画ありますが、まだ一人も借りていらつしやらないので、どこでも契約できますよ」

### 【農地】

各街でプレイヤーが借りたり、買ったりできる土地

一 区画ごとの値段は街によって異なる

一 ヶ月（二十八日）借りて農業実績を作り、農業ギルドからの信頼を得れば購入可能

農地がすべて使用されている状態では、新規の契約が不可能になる

農地取得数制限はない

碁盤目状に線が引かれた土地が示された。僕が歩いてきたのは街の西側が主だったから、北側はまだ行ったことないエリアだ。マップから考えると、第三の街に続く方面かな。

強いモンスターが出るバトルフィールドに面した農地が、プレイヤーに割り振られてる気がする。

「百個もあるのかー。どこがオススメとか、ある？」

「中心街に近い方が、利便性はいいですね」

それしか言わないということは、区画ごとに作物の育ち方の違いはないっぽい。

「じゃあ、中心街に近いところの端がいいな」

「通りに面したところではなくていいのですか？」

僕が一番西の端にある一区画を指したら、不動産屋さんが不思議そうな顔をした。

農地を半分に分けるように中心街から続く広めの道があって、それが北門に続いているみたいだから、その近くが一番便利なのは僕もわかってる。

「そこ、目立つでしょ？ 僕、ジロジロ見られるの嫌だから端っこがいいな」

「あー……ただでさえ、目立つご容姿ですしね」

苦笑いされた。理解してもらえて何よりです。はじまりの街でも、たくさん視線を感じたもんなあ。話しかけてくる人は不思議とあまりいなかったけど。

「——では、ここをご契約ということで。農地一区画の賃料は、一ヶ月で千リヨウです」

ゲーム内時間で一ヶ月というと、現実だと約一週間だ。それで千リヨウなら安いと思う。

「もう一区画追加でお貸しすることも可能ですよ」

「うーん、それはやってみてから考えようかな」

一区画でどれくらい収穫できるんだろう？ 種とかをどこで買えるかも、調べないといけない。「わかりました。農地をご購入できるのは、一ヶ月農業をしていただいて、その収穫物を農業ギルドが判定し『優』と認定された上で、継続的に農業を行う意思を誓約せいやくしていただいた後になります」

「農業ギルドで判定ね……わかったよー」

マップを確認したら、北の農地近くに農業ギルドがあるみたい。農地を見てから行ってみよう。「続いて、ホームの賃貸についてですね」

不動産屋さんがそう言うと、ホームについての説明がスクリーンに現れた。

### 【ホーム】

各街でプレイヤーが借りたり、買ったたりできる建物。物件ごとに値段は異なる

ホームを購入するためには、まずは一ヶ月（二十八日）借りて信用を得ることが必要

賃料は低めに設定されているが、購入には多額の費用が必要となる場合が多い

ホームがすべて使用されている状態では、新規の契約が不可能になる

ホーム取得数制限はない

「ご希望の間取りはございますか？」

「間取り……とりあえず、寝室と工房があるといいなーって思ってるよ」

「寝室はもちろんどの物件にもございますが、工房となると……ご職業は？」

「錬金術士れんきんじゆしだよ」

不動産屋さんが頷いてスクリーンを操作し、二軒の物件を表示した。

「どちらも、すでに錬金術士用の工房が備えられています。一軒目は大通り沿いに建つ、築百年のレンガ造りの一軒家ですね。一階が工房で、二階が居住空間になっています。二階の間取りは1LDKです」

一人で過ごすなら十分そうだ。部屋自体はそんなに大きくないようだけど、僕は小さいし。でも、リリたちを呼ぶってなったら、ちよつと狭く感じるかも。

「築百年なので、壁紙や床、水回り設備などをリフォーム可能ですよ」

「なるほどー……そこまでこだわりないや」

僕が適当に頷くと、不動産屋さんはすぐに次の物件の説明に移った。

「二軒目は築三年の鉄筋コンクリート造りの一軒家です。こちらは一階が工房で、二階が居住空間になっています。間取りは2LDKです」

「あ、こっちはいい！ しかもお値段が安いね」

一軒目の方に表示されている一ヶ月の賃料は千リヨウだったけど、二軒目の方は七百リヨウだ。

「こちらの物件は中心街から離れていて、北の農地に近いんです。そのため、住民からは人気がなく……」

不動産屋さんが苦笑いしてる。前の住人が、建てたはいけどすぐに街を出ることになって、それからずっと空き家状態らしい。ほぼ新築同然なんだって。

「僕にとつては便利なところだね！　ここ借りる！」

いいところが見つかった。中心街から遠くても、僕には転移スキルがあるから問題ない。

「ありがとうございます。こちらの物件は、問題がなければ一ヶ月借りた後に販売可能になると思いますので、購入をお考えの際はご相談ください」

不動産屋さんも僕もニコニコだ。お互いにいい取引になったね。

「では、ホームと農地にご案内します」

マイホームと農地、楽しみだな！　……賃貸物件だけだ。

不動産屋さんと一緒に、まずはホームに向かった。

内覧する建物は、ご近所さんの家と似た感じのペールグリーン色。

濃いめのグリーンの玄関ドアを押し開けたら、一級錬金術士のレナードさんの工房に似てる部屋があった。全体的に木でできてる。右手側の壁は一面柵で、左手側には作業台がある。奥には二階に続く階段。階段下には扉があるような……？

「一階の工房は、錬金術士に必要な基礎設備を設置済みです。ストレージの使用や、錬金術ギルドとのアイテム売買が可能ですよ」

「おお！　それ欲しかったやつ」

部屋の片隅にある工房タブレットで錬金術ギルドとやり取りができるらしい。

工房内なら、錬金術士カードを出すだけでストレージ——アイテムの無限収納庫を使えるみたいだ。これで心置きなく錬金術を使えるね。

最近の僕は魚釣り用の釣り餌を錬金術で作るのにハマってる。餌に使う素材が違くと、釣れる魚の種類が変わるんだよね。欲しい魚はたくさんあるけど、特に釣りたいと狙ってるのはうなぎ！

僕はうなぎを食べたいんだよ。

「工房を店舗にするには工事が必要ですが、そちらは物件購入後のご相談になります」

錬金術で作ったものを店で売るのも楽しそう。そのためには、お金を貯めなきゃいけないなあ。

「奥の扉の外は庭です。狭いですが、薬草の栽培も可能ですよ」

「え、凄いい！」

扉を開けて覗いてみたら、確かに小さめの庭があった。今は何も植わってなくて殺風景だ。

二階の床部分が屋根になっていて、あまり日差しが入らない。日陰で育つ植物の栽培にいいかも。

「では、二階をご案内します」

二階は上がってすぐのところがりビングになってた。

キッチンの反対側に二つの扉。大きめの窓もあって、日当たりがいい。

リビングから続く二つの部屋はあまり広くないけど、寝るだけなら十分。正直、ベッドを置けさえすればホームとしては十分なんだよね。ベッドがデータセーブ地点になるから。

「完璧！　満足です」

「それはよろしゅうございました。では、続いて農地に行きましょう」

ホームを出てから五分も歩かない内に、ひたすら地面が広がっているエリアに着いた。区画分けする感じで細い道が碁盤目状に走ってる。北門に続く中央の道だけが広めだ。「モモ様のご契約しているのはこの奥ですわね」

トテトと西側に続く細い道を歩く。農地一区画の大きさは、学校のプールくらい。僕が選んだ農地の奥には果樹園が広がってた。これは異世界<sup>N</sup>の住人<sup>o</sup>が管理してる場所なんだって。たわわに実ってるオレンジが美味しそう。

「異世界<sup>レイヤ</sup>から旅人<sup>ャ</sup>さんは、農地の管理者になると農地管理システムを使用可能です」  
「なあに、それ？」

「モモ様はすでに賃貸契約済みですので、農地に入ってみるとわかりますよ」

僕は「うん？」と首を傾げながら、自分の農地に入ってみた。

土がふかふかく。いい土な気がする。そんなことを考えてたら、目の前にスクリーンが現れた。

「ふあっ……あ、これ、メニューみたいな感じ？」

フレンド欄やミッションを確認できるメニューと同じ感じで、【種まき】【水やり】【肥料】【収穫】【設備】という項目があった。

アイテムボックスから種を選んだ後、まく場所を決めたら自動的に種まきをしてくれるらしい。水やりと肥料、収穫も同じで、随分<sup>ずいぶん</sup>と作業が楽そうだ。

一つわからないのが【設備】の項目だけ……とりあえず選択してみたら、いろんなイラストと一緒に説明文が現れた。

【井戸】とか【スプリンクラー】とか【倉庫】とか【作業小屋】とか――

「凄っ！ 箱庭作りみたいで面白いねー」

噴水<sup>ふんすい</sup>、ベンチ、遊具なんでものまである。もはや農業じゃなくない？ 楽しくていいけどね。

「種や肥料はご自身で用意していただく必要があります。農業ギルドである程度のアイテムを売っていますが、モンスターのドロップアイテムや錬金術で作製可能なものもありますので、いろいろと試してみてください」

「はい！ 楽しみだなあ。早速農業ギルドを見てみようかな」

「では、ご案内はここまでに。賃料は自動引き落としです――楽しいスローライフを」

手を振った不動産屋さんが一瞬で消えた。不動産屋さんって、転移スキル持ちなの？

ちよっぴり戸惑ったけど、まあいっか、とスルーして、農地を見渡す。

まだ僕以外誰も借りてないから寂しい感じだけど、にぎわったらさらに楽しくなりそうだ。

「早速、種を買いに行こうっ」と

歩き出そうとしてハッと気づく。転移スキルの設定をしておいた方が楽じゃん！

「んーと……【転移ピン】！」

唱えた後にマップを確認したら、青い矢印が現在地についてた。これが転移できる場所の印<sup>しるし</sup>なんだろう。街中には三つしか転移ピンを設定できないから、ちゃんと考えて使おう。

「ルンルンルン♪」

飛翔<sup>フライ</sup>スキルで飛んで移動する。障害物が一切なくて、飛ぶの楽しい！

すぐに中心街に入っちゃったけど、農業ギルドまで人通りが少なそうだからそのまま飛んで行く。  
「おっと、ここだ……！」

調子に乗って通り過ぎそうになったのはご愛嬌あいぎょう。てへぺろ。

農業ギルドの印である木と花のマークの看板がかかった建物の扉を開ける。

中は園芸店みたいな感じで植物がいっぱいだった。こういう雰囲気、結構好き。

そこで作業をしたエプロン姿の熊みたいなおじさんが、僕を見て片眉を上げた。

「こんにちはー」

「お……異世界のやつか」

「そうだよ。農地を借りたから、種を買いにきました！」

「お前が異世界のやつの中で一番手だな。そんだけ農業に熱意があるんなら嬉しいぞ」

おじさんがニヤリと笑う。好意的な笑みえのはずなのに山賊さんぞくのように見えるのは、顔の下半分を覆おほう、もじやもじやヒゲのせいだよ、きつと。

「農業がんばる！ 美味しい料理を作りたいからね。僕はモモ。よろしく」

「モモか。俺はサンゾーだ。この街の農業ギルドの長おさをしてる」

ギルド長つて暇なの？ 受付の人みたいに軽い感じにいるね。

「農業ギルドの説明をしてほしいな」

「もちろんだ。こっちに来い」

連れて行かれたのは、植物に囲まれたテーブル。緑があると落ち着く。

ニコニコしながら僕は椅子に座って、サンゾーさんを見上げた。

「農業ギルドは基本的に植物の種や肥料の売買を行っている。相談にも乗るから、気軽に声をかけてくれ」

「親身だね。ありがと」

「おう。一人でも農業人口を増やすのが、このギルドの使命だからな！」

ガハハッと笑いながらサンゾーさんはちよつと照れてるみたい。見た目より可愛い人だ。

「農作物や料理などの買い取りは商業ギルドが担にってる。商業ギルドから許可が出れば、市場に屋台を出せるから、気が向いたらやってみるといい」

「ほえー、屋台での販売システムがあるのかー」

はじまりの街ではプレイヤー同士の個人間取引しかできなかったけど、商業ギルドから許可が出れば、ゲームシステムを使って売買ができるようになるらしい。

金銭トラブルを防止できていいかも。遊び感覚でやってみようかな。農作物を収穫したら料理して、それを誰かに食べてもらうのも楽しそうだし。

「うちのギルドの説明はそんな感じだな。種を買いたかったら、こっちだ」

案内された一画には、ズラッと麻袋が並んでた。それぞれ植物の名前が書いてある。

「ここから必要な分だけ買うことができる。初心者には【大根】や【レタス】【トマト】あたりがオススメだ。大体七日で収穫できるぞ」

それぞれ種十個で一リヨウって書いてある。お安いね。

大根ができたなら、ブリ大根を作りたいな。ブリはまだ釣ったことないけど。サンマの塩焼きに大根おろしを添えるのもいいな。サンマもないけど。

レタスとトマトはサラダに最適かな。トマトは煮込み料理にも使えるし……あ、アクアパッツァ作りたい！でも、貝がない……海に行かないと！釣りしたい気分が高まってしまった。

でも、今は野菜を育てるのが先だよ。それから魚介類の入手をがんばろう。自分で作った野菜は美味しいだろうな。

「じゃあ、その三つをちょうだい。百個ずつ」

「おう。じゃあ、これな」

お金を渡して、種が入った小袋を三つもらう。

この小袋、大きな袋に三つとも入れたらアイテムボックスの一杯に収まるらしい。収納領域の節約は大切だし、大きな袋も購入してから近くの苗なえを見つめる。

「……ミカン？」

「ああ、そっちは果樹の苗が置いてある。今の時期に植えるならミカンがオススメだ。それは【太陽ミカン】って品種で、凄く甘い実ができるぞ」

「おー、いいね！ 桃はないの？」

「桃？ あー……【白美桃】はくびちうならあるぞ。ちよつと小ぶりだが、これも甘い。生で食べるのがオススメだ」

自分で育てた桃、絶対美味しいでしょ！ というわけで、【白美桃の苗】と、ついでに【太陽ミ

カンの苗】も購入。それぞれ百リヨウだった。

「がんばって育てるよ。実ができるまで、大体二十日くらいかかる」

「わかったよ、がんばる！」

現実時間だと五日くらいってことか。だいぶ早いね。余裕で待てる。

美味しい果物にするには肥料が必要だけど、オススメの肥料は果樹ごとに違うらしく、サンゾーさんに言われるがまま購入した……今日はだいぶ散財してる気がするけど、大丈夫！ お金は貯まってきたからね。いざとなれば、作り溜めてる料理とかを商業ギルドに売りに行けばいいし。

「んー、農業楽しみ！」

「そんだけ楽しみにしてくれんなら、俺も嬉しいぞ」

ワイルドな感じで笑ってるサンゾーさんに見送られて、農地に戻る。

初めて転移スキルを使ってみるよ。設定した転移ピンを選択して――

【転移】――！

スキルを発動したら、一瞬で畑に戻っていた。転移ってはやーい！

早速、種をまこうと思ってアイテムボックスから取り出すと、畑に縦横二十マスずつの表示が現れた。四百マスに作物や設備などを置けるみたいだ。

苗は四マス使って植える感じだったから、単純に四百個植えられるわけじゃない。

買ってきた種（計三百個）と苗（二つ）を全部まいたり植えたりしてみた。ここに植えるぞーって指示を出したら、勝手にやってくれるから楽！ 農場ゲームを思い出す。

農場ゲームって、収穫物保存用の倉庫を拡張するのに苦労するイメージなんですけど、僕の場合、工房でストレージを使えばいいんだよね。ストレージはほぼ無限大の収納だし。

「でも、いちいち工房に運ぶのは面倒くさい気もする……」

むむ、と考え込みながら畑を眺める。

ひよろつとした苗が二本あるだけで、まだ芽が出てない畑はちょっと寂しい感じ……

設備を確認したら、スプリンクラー（自動水やりシステム）が重要って説明文を発見した。

ゲーム内時間で四日間水やりをしなかったら、作物が枯れちゃうんだって。今気づいてよかった。

「うわ……お高い……」

スプリンクラーは百マスに一個の割合で置かないといけないみたい。つまり、この畑全体を賄うには四個必要で、一個五百リヨウだから計二千リヨウ……農地の賃料を超えてるんですけど？

「——必要経費だよね」

所持金とにらめっこしつつ、スプリンクラーを購入・設置。これで作物が枯れちゃう心配はなくなったけど、ちよつと金策を考えないとね。

岩屋を倒した報酬である不労所得アイテム【打出の小槌】は一日一回使用できて、ランダムでお金を入手できるけど、まだ百リヨウしかくれてない。僕の幸運値、結構高めだと思ってただけど、効果が出てない気がする。最高額の一万リヨウをくれてもいいんだぞー？

「倉庫も欲しいんだけどなあ」

眺めるのは設備【倉庫】の表示。作物や農業関連の道具を百種百個ずつ収納できるらしい。問題

は、設置するのに二千リヨウがかかること。払えないわけじゃないけど、余裕があるわけでもない。

「うーん……料理を作って、商業ギルドに売りに行ってみるか！」

作製したアイテムを売るのがどんな感じかも気になるし、金策も兼ねてやってみよう。

そうとなれば、ホームへ戻らないと。死に戻りに備えて、ほとんどの素材をストレージに預けるから、今の状態だと何も作れない。

「また来るからね、僕の農地くん」

名残惜しさを感じながらも、ホームまで飛翔スキルでひとつ飛びした。

ホームの工房でストレージから素材を引き出し、ひたすら錬金術と料理スキルで作業をする。この地道な感じ、嫌いじゃない。なんか無心になれるんだよね。

幸い、素材はたくさんあった。はじまりの街ではよく魚釣りをしたし、僕がタイムしたスライムのスラム君の協力もあって毎回大漁だったから。

「魚料理ばかりっていうのは、ちよつと寂しいけど……」

アイテムボックスにしまった料理の数々を思い出して苦笑いしちゃう。

魚を使った料理ばかりだけど、一応味付けとか調理方法とか変えて、種類だけはたくさんある。

最後に作った料理『金鱈の刺し身』はそのまま自分の口へ。ぷりつとした食感で程よい脂のりだ。

「ん、やっぱりうまうま！」

何度食べても、ゲーム内で食べるご飯は驚くほど美味しい。

「あ、お米ゲットしないと！」

忘れてたことを思い出した。

第二の街にはお米があるはずなんだ。日本人として必須の主食は確保しないと。農業ギルドにはお米の苗はなかったから、稲作するには条件があるのかな。とりあえず、市販のお米を探そう。そんなことを考えながら、まずは金策のために商業ギルドがある中心街に向かう。

飛翔スキルで飛んで行くよ。

「ママ、見て、ウサギさんが空飛んでる！」

「ウサギが空を飛ぶわけではないでしょ——って、飛んでる!？」

道を歩いていた親子に目撃された。男の子が手を振ってくれたから、僕も振り返す。ママさんは驚いてるみたいだけど、僕、危ないモンスターじゃないから安心してね。

愛想を振りまきながら街を進んでたら、電卓みたいなマークの看板が見えた。商業ギルドだ。一旦ここに転移ピンを設定。

商業ギルドにはひっきりなしに人が出入りしてる……ちょっと緊張してきたぞ？

考えてみたら、商人とがつつり話すのは初めてかもしれない。ポツタクリされないよね？

「……たーのもー！」

気合いを入れて中に進む。決して、道場破りをするつもりはない。

カウンターにいるたくさんの受付さんや、そこに並んでる人たちから視線が集まって、ちよつぴり恥ずかしくなった。

調子に乗ってごめんなさい……そそくさと【商品買取カウンター】と書かれているところに並ぶ。

「あんた、異世界からの旅人ってやつ？」

僕の前に並んでる女の人がわざわざ振り返って尋ねてきた。猫系の耳と尻尾がある獣人さんだ。

「そうだよ。僕は冒険者のモモ。今日は僕が作った料理を売りにきたんだ」

「へえ、そりゃいいね。私はヒョウ族のマンって言うんだ。まだ駆け出しの米農家さ」

「お米！」

思わずマナさんの方に身を乗り出した。僕の勢いに、マナさんが目を丸くして驚いてる。

「そ、そうだけど……米農家って、そんなに驚くもの？」

「ううん。ただお米欲しくなっちゃおうど思ってたから。お米売ってくれる？」

期待を込めて聞いてみた。でも、マナさんは「あー……それは難しいな」と言っただけで苦笑いしてる。「この街じゃ、米は商業ギルドが一括で買い上げて、各店舗に卸すんだよ。知り合いにちよつとあげるくらいは見逃してもらえりけど、売るのはルール違反なんだ」

「へー、そんなルールがあるんだ……」

店舗で買うしかないのか。しょんぼりしちゃう。

【マイドン米店】はいろんな品種の米を取り扱ってて、リーズナブルだよ」

苦笑いしたマナさんが教えてくれた店をマップで確認すると、ここに来るために通ってきた道沿いがあった。見逃してたな。

「あ、近いね。後で行ってみるー！」

「——お次の方、どうぞ」

「おっと……お先に失礼」

「うん、教えてくれてありがとう」

マナさんがカウンターへ進む。手を振ってお礼を言ったら、すぐに僕も呼ばれた。三人体制で受付してみた。

僕の担当をしてくれる受付さんは、緑色の髪の女性だった。

「本日の商品はどのようなものでしょうか？」

「いろいろな料理なんだけど」

言いながら、僕はアイテムボックスから食料ボックスを五個取り出した。

食料ボックスは、五種類の食料アイテムを各種五十個までまとめて保存できるアイテムだ。

受付さんは食料ボックス内のアイテムを鑑定できるのか、すぐに紙に何か書き始める。

「魚料理ばかりということは、はじまりの街からいらしたんですね」

「そうだよー。第二の街じゃ、魚は獲れないの？」

「西の岩場を越えると海がありますが、道中のモンスターが強いので、わざわざ魚を獲りに行く人はいませんね」

受付さんが肩をすくめる。なんだか嬉しそうな顔をしてる気がする。

「……もしかして、魚料理、この街で大歓迎？」

「はい。はじまりの街から魚を入手していたのですが、交易を妨げるモンスターが現れてからは難しくなってしまったのです。そのモンスターは討伐されたようですが、その後、別のモンスターが

やってきているらしく、以前通りの交易にはならない感じですし。それでも、近日中にある程度回復する予定です」

別のモンスター？ 岩犀ロックライじゃないやつってことか。街開放のワールドミッション達成後に新たに

設定されたエリアボスって感じかな。

岩犀ロックライは一度倒されたら復活しないタイプの敵だったってことだ。

「新しく来たモンスターって、岩犀ロックライくらい強いなの？」

「いえ。この街の一般的な冒険者パーティで対応できるのですが、退治してもすぐに復活するよううで。一度倒したことがある人だと、モンスターのほうが恐れを感じるのか襲ってこないらしいですよ」

戦うのは一回限りでいいってことか。レベリング目的でバトルを挑むことはできるんだろうけど。僕の場合どうなんだろう。その新たなモンスターとは戦ったことないし、バトル必須な気がす……ますますはじまりの街に戻りにくくなってるじゃん！

「今は、はじまりの街に向いているこの街の冒険者が、仲良くなった異世界出身冒険者と協力して、ひたすらモンスターを倒すという方針のようです。ついでに、損傷が大きい街道整備もしてくれるといいのですが」

「共闘ってことかあ」

僕がイグニスさんに戦ってもらって、クリアしたのと同じ感じかな。

プレイヤーだけだとクリアするのが難しい難易度に設定されてるんだと思う。共闘するにも、バ

トルチュートリアルで出会った指南役との友好度を高める必要があるみたいだ。

街道整備の必要性が出たのは、イグニスさんの攻撃による影響な気がする……ちよつと責任を感じるし、僕も整備に参加できそうならやってみよう。

「そうですね——査定が終わりました。料理二十五種、四百三十二品でお間違いないですね？」

「そんなに作ってた？ 改めて数字で聞くと、膨大な量だなあ……」

「うん、たぶん合ってる」

「現在、魚料理の買取額を増額していますので、総額七万四千リヨウでの買取になります。すべて買い取らせていただいてもよろしいですか？」

紙を示された。それぞれ料理名と買取額が書いてある。真鱈のお刺身が百二十リヨウだつて。自分で買うってなつたら躊躇しちゃう高さだけど、買い取ってもらえるなら嬉しい。

「あ、刺身は一部、買取に出さないとおこうかな」

近々お米が手に入る予定であることを思い出して、海鮮丼を食べたいあまりに刺身各種を返してもらった。今はじまりの街に気軽に行けない以上、魚は僕にとつても貴重だし。まだ少しストレージに残ってるけどさ。

「わかりました。ではお刺身代を引いて——七万三千リヨウでいかがですか？」

「ちよつとおまけしてもらつてるような？ ありがたく受け取ろう。」

「それでお願ひします」

「では、こちら代金です——今後もいいお取引をよろしくお願ひします」

所持金の桁が上がった。一気に大富豪になった気分！

「こちらこそー。ありがとね！」

お互いにいい気分になつてお別れ。商業ギルドはフランクに利用できそうところだったな。

帰りに、マナさんにオススメされた店でお米を買った。そして、ホームで早速料理を始める。

「モモのちやちやつとクッキングの時間だよー！」

拳を握って宣言してみたけど、一人でテンションを上げてるのは虚しい……ホーム内を見渡して、僕はため息をついた。

はじまりの街で買っておいたホームインテリアを並べて、結構快適な空間になつてるけど、なんか物足りない。やつぱり招く友だちがいらないから？ リリとルト、早く第二の街に来ないかなー。

「気分を上げて楽しもう」

うん、と頷いて、キッチンでアイテムボックスから食材を取り出す。

「品種はよくわかんなかったけど、店主さんが酔に合うお米って言つてたし、大丈夫だよね？」

麻袋に入ったお米を覗く。米屋さんにはたくさんの種類のお米が並んでた。

このゲーム、食材の品種にこだわりすぎでは？ 米の品種の多さには、ちよつぱり執念を感じちゃつたよ。それぞれで味の違いを表現するのが難しそう。

まあ、僕はそんな違いがわかるほど敏感な舌を持つているとは思えないから、店主さんのオススメを買つてきた。酢飯にするんだよーって言つて教えてもらった『ササアヤオリ』って品種。

「とりあえず、お米を炊く！」

鍋にザラザラツとお米と水を入れて、料理スキルを発動。

魚料理をたくさん作って、料理スキルのレベルが3になったんだ。

【切る】【焼く】【煮る】【揚げる】の他に、【混ぜる】【オープン焼き】【燻製】【炊く】【冷やす】【成形】の工程ができる。

炊くって、お米以外で使うことあるのかな？ お米への執念が料理スキルにまで影響してない？

「炊けたらお酢と混ぜるだけ〜」

ルンルン、と鼻歌を歌ってる間にお米が炊けた。料理スキルを使うと、待ち時間短いのがノンストレスでいいよね。街で買ってきたお酢を混ぜようと思って、ハッと気づく。

「酢飯のお酢って、ただのお酢ではなかったのでは？」

お酢の瓶のラベルに書かれているのは『米酢』の文字……ちよつと調べよう。

掲示板の料理スレで質問してみる。

『酢飯に使うお酢って、米酢でいいの？』

『はじまりの街にお米あったっけ？』

『なんかのミッションでゲットしたとか？ うらやま』

『米酢に砂糖と塩入れたら、すし酢になるよ』

お、さすが料理スレの住人さん。すぐに答えが出てきた。僕もリアルで料理を勉強するかなあ。

たぶんイメージが詳しくできると、ゲーム内での料理に反映される気がするんだよね。

今は教えてもらった通りにすし酢を作る。

【混ぜる】スキルと自分の手で混ぜるの、違いがあるのかな？ 僕は不器用だからスキルを使うけど、手作業の方が美味しくなるとか、ある？

「すし酢、完成〜。お米と混ぜるぞ」

これもスキルで楽ちん。うちわで扇ぎながら混ぜるイメージがあるんだけど、あれってなんで？ 粗熱が悪さするの？ あれやつてる姿、職人さんって感じがするよね。

「酢飯、ほかほか〜。ちよつと冷やしてから、これをどんぶりに盛って——」

スキルで勝手に器が出てくるけど、これは味気ないから買ってきたどんぶりに盛る。その上にお刺身を並べたら、あつという間に完成！

「初海鮮丼、天ぷら添え！」

海鮮丼のお魚は真鱈と金鱈、暴鱈、林檎間八、銀剣魚。

林檎間八と銀剣魚は釣人ランクが上がってから新たに釣れるようになった魚系モンスターだ。名前通り、カンパチとタチウオに似てる。

海鮮丼に愛鱈と大沙魚の天ぷらも並べたのは、ただ食べたかったからだよ。

「豪華海鮮丼、いただきまーす」

僕の身長に合わせたダイニングセットに座り、手を合わせる。

箸を使えないのがちよつと残念だけど、フォークで刺してパクツと食べる。

「刺し身うま〜。林檎間八アプルカンバチはほのかに甘みがあつてぷりっぷり食感が最高！ 酢飯もいい感じ〜」心が満たされて、体も元気になる感じがする。お寿司が好きだつて言つてたりにも食べてもらいたいな〜。でも、にぎり寿司の方がいいかな？

料理スキルの【成形】を使えば作れる気がする。そうすると、寿司ネタにもこだわりたい。

「やっぱり、はじまりの街には戻りたいな」

うまうま、と食べ進めながら真剣に考える。

第二の街で一番の目的だったホームと農地をゲットしたから、そろそろはじまりの街に戻る方法を探したい。

せめて、転移ピンは設定しておきたいよ。

「むむ〜……死に戻りするかもしれないけど、がんばってみるかな？」

はじまりの街と第二の街を繋ぐノース街道の奥に、僕一人では行つたことないから、モンスターの強さがわからないや。

岩屋イワクラの後に遭遇した苔むした岩ゴレムは逃げ一択になるくらい強かつたけど。

「まだ他のプレイヤー来てないっぽいしなあ……」

掲示板を覗いてみた。それによると、攻略組——バトル重視型のプレイで攻略の前線にいる人たちは、新たなエリアボスモンスターに苦戦してるらしい。

商業ギルドの人は『この街の一般的な冒険者なら対応できる』つて言つてたけど、あれはプレイ

ヤーの指南役をしてくれたカミラみたいな強い冒険者を基準にした発言気がするんだよねえ。

プレイヤーの実力はまだそこまで達してないよ。

「みんな、異世界Nの住人Cとの共闘が鍵かぎつてわかつてるのかな？」

攻略スレの人が愚痴ぐちっぽくなつてるのを見て、首を傾げる。

指南役だつた異世界Nの住人Cと一緒に戦うつて言つてる人がいないような。これ、教えてあげた方がいいのかな。

「——攻略スレに書き込むのは緊張する……」

なんせ、僕はマイペースに楽しんでるだけなので！ 『どんどんバトルするぜ！』と言つてる人に親しみがない。

好戦的なルトも温厚なリリと一緒に行動してるから、そこまでがつついてないもんなあ。

でも、書き込まないのもちよつぱり罪悪感がある。チートっぽい方法でワールドミッションをクリアしちゃつた引け目？ というわけで、コメントを用意してみた。

『バトルチュートリアルの指南役と仲良くなると、一緒にボスモンスを倒してくれるっぽいよ』

僕であることが特定されないような書き方してみたけど、これでいいかな……うん、いいはず！ 送っちゃえ！

開き直つた感じで掲示板に載せた。すぐにレスがつく。

『マジ？ これ、そういうイベントだったの？』

『指南役とか、チュートリアル以来会ってねえよ……』

『ひたすら挑み続けた攻略組さん、おつかれw』

『草生やしてんじゃねーよ！ おかげで【絶望に挑みし者】って称号もらっちゃまったよ！』

「え、何その称号、響きがカッコいい……」

自分のステータスにある称号を見て、思わずしょんぼりしてしまった。だって、そんなにカッコいい称号は持ってない。特に、スライムの王様をクッション代わりにして獲得した【スライムキングを尻に敷く】が異彩を放ってる。

「僕も、こっち側からエリアボスに挑み続けたら、カッコいい称号をもらえる？」

急にやる気が湧いてきたぞ？ やっちゃう？ 死に戻り上等だぜ？ ……ごめん、この口調はなりきれないや。

第一、僕の見た目に合っていない。

プリティーに言うなら『死んじやうかもしれないけど、がんばるもんね！』かな。

「よし、次回ははじまりの街への帰還を目指してがんばるぞ！ えいえいおー」

一人だけど気合いを入れるために声に出してみる——虚しいだけだった。

この後、ログアウトしないといけないし、決意表明のタイミングを間違った気がする。

「……あ、ログアウト前に、畑の様子見てこよー。ついでに倉庫も設置しところかなー」  
今の僕は大金持ちなので、いろいろ買えちゃうぞ！

★★★

本日もログイン。目を開けてすぐに見えたのは、まだ慣れない部屋の天井だった。ホームの寝室にはベッドだけを置いてる。ホーム全体をもっと飾って遊びたいけど、今ははじまりの街に行くのが優先だ。

「失くしたくないものはストレージに入れたし、準備オツケー」

装備品は天の杖と耐衝撃用アンクレット。杖の大きさを錬金術で調整したから、片手で扱いやすくなった。アイテムボックスに入ってるのは、体力回復薬と魔力回復薬、リンゴだけ。

「よっし、行くかー」

気合いを入れたけど、まずは農地に寄り道。

ログアウトする前に確認した時は、ちよっぴり芽が生えた状態だった。今は——  
「おー、わざわざしてるー！」

農地の一部が緑色になってた。レタスと大根は葉っぱが増えてるし、トマトは茎が伸びて、もうすぐ花が咲きそうな感じ。次にログインする頃には収穫できるかも。

収穫した作物で何を作るか考えたらワクワクする。美味しいもの作って食べたいなー。